

ラオスの こども通信

59号
2013年12月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 緊急のお願いです! ▶P.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2013.8-2013.11]
ラオス発 ▶P.2 日本発 ▶P.3
- みんなでボランティア ▶P.4
- 「勉強会」報告 ▶P.4
- メコンのほとり「映」 ▶P.4



緊急のお願いです! スタッフの給与をご支援ください。

新事業スタート直前で発生した事態

「ラオスのこども」は、2013年11月から新事業の開始を予定し、スタッフを新規雇用するなど様々な準備を整えてきました。しかし、ラオス政府による覚書文書の発行が遅延し、始められずにいます。この事業は、地域の人々が担い手となって地域に根を広げていくことをめざしたものです。まちや村に本を手にとりできる場(書店、図書館)がほとんど存在しないラオスにあって読書の機会を生み出し、また当会にとっても、読書活動を学校だけでなく、一歩踏み出して地域に広げていく、新たな挑戦となるものです。これはJICA草の根技術協力事業によるもので、ラオス政府と当会との覚書取り交わしがいなければ開始できず、事業資金を受け取れません。

覚書の取り交わしは、これまでも幾度も行い、遅延は織り込み済みですが、今回のような事態は初めてです。団体に余裕資金があれば、さして問題にはならないかもしれませんが、当会はゆとりがなく、決算においても黒字化できましたが、つねに資金は不足しています。待機となるスタッフについては、事業に向けた研修の機会ととらえ直し、スキル向上に努めます。



先生の相談にのる当会スタッフのバンロップ(左)とスックパンサー(中央)

本は配っただけでは読まれない スタッフによる繰り返しのフォローがあってこそ

当会が手がけている読書活動は、本を学校に届けて終わるものではありません。かつては、本を置いてくれば、本は利用されるものと思いついていましたが、配布後に利用状況調査を行うと、放置され、ホコリがかぶっている学校も残念なことにあります。そうなってしまう理由は数々ありますが、最も大きいのは、子どもたちに本を親しませるべき先生自身読書経験がなく、本の魅力を知らないことです。

そうした先生たちも、読み聞かせなどの研修を受け、子どもたちに読んであげ、惹きつけられるのを目の当たりにする中で、読書活動の大切さを理解するようになります。とはいえ、先生の給与が安く、遅配も珍しくないラオスでは、授業が終われば帰って農業などに従事する兼業先生が多数を占めるので、子どもに読書指導をするモチベーションを維持することはたやすくありません。

そのため、当会では、研修を繰り返したり、相談に乗ってアドバイスしたり、再訪時に本を追加支援するなど、スタッフがができる限り足を運んで、先生の意欲喚起に努めています。そうしてこそ、子どもたちは本に親しむことができるのです。

今回、始めようとしている新事業は、先生と子どもたちだけでなく、保護者、地域の人々をも受益者とするもので、スタッフのいっそうの活躍が期待されます。こうしたことから、当会の事業は”人”がメインで重要な役割を果たしており、その”人”を支える費用が必要不可欠です。

ラオスにおいて、本を楽しめる場を増やしていく活動に、ご支援ください。

(森透/理事)



作業を手伝いながら図書室運営のアドバイスを
する当会ラオス事務所のスラビー(右)

ラオス 発

「どんなセンターになってほしい？」

子どもセンターの今日的意味と 支援のあり方をさぐる評価活動

当会は日本の児童館に相当する「子どもセンター」をラオス各地で約20年にわたって支援しています。図書室と遊び場を備え、子どもたちに読書、絵画、音楽、演劇、伝統芸能、手工芸などの活動の機会を提供しています。

2013年7月～8月、当会が支援する6センターと支援をしていない3か所、過去に支援し現在は支援していない1か所、計10のセンターで、子ども、館長、職員、保護者、管轄する行政官に聞き取り調査をしました。また、聞き取りでは引き出せない気持ちを把握するため、「絵地図分析」ワークショップを、専門家である田島伸二理事と協力して実施しました。

今日、ラオス社会は急速な経済成長、都市化、観光化が進み、子どもたちにとって、ドラッグ、人身売買、隣国への出稼ぎは身近な出来事です。こうした背景を踏まえ、子どもセンターが子どもや地域に果たしてきた役割を調査し、センターの今日的意味と支援のあり方を明らかにするため、評価活動を実施しました。

「子どもセンター」とは

ラオスの学校は国語・算数など「覚える」学びが中心で、読書の環境もなく、音楽や図画工作など「表現する」学びが行われていませんでした。当会はラオス情報文化省と協力し、子どもたちの自由な課外活動の場として、1994年、ラオスで最初の「子ども文化センター(CCC)」をヴィエンチャンに設置しました。

この活動は徐々に注目を集め、現在、情報文化観光局や教育スポーツ局が中心となって全国39か所以上で開設されています。

職員の声

「いちばん上手くいっている活動は何？」という質問に、「踊り、歌、楽器」など音楽活動をあげる職員が多かったです。設立当初は伝統舞踊や伝統楽器の講座のみでしたが、近年は都市部を中心に合唱や様々なダンスを楽しむなど広がっています。

これらは、ほとんど道具を必要としない、地方でも伝統音楽の指導者が見つけ易い、イベントでの発表の機会があり成果を披露しやすい、などが高評価の要因といえます。

センターの役割を聞くと、「子ども自身の能力を引き出し、磨くところ」「経済的な余裕のない家庭の子どもが、チャンスを得られる場」「学校とは違う新しいことを学ぶところ」「安心して子どもを預けられる場」「子どものモラルやマナーを訓練する場」といった意見がでました。

子どもの声

一方、子どもたちの好きな活動は、偏りがみられません。「センターに遊びにきた」と言い、どの活動も楽しんで参加している様子です。センターに来る目的を聞くと、「踊りたい」「絵を描きたい」「工作、ゲームをしたい」「楽しいから」「好きなことがたくさんできる」と様々な返事。

「友達とあそぶこと」「塗り絵をしたり、民話をきくこと」「先生のように友だちに教えられること」と楽しみをあげる子どももいました。子どもたちにとって、センターは学校とは違って、成績を評価されない、自分の好きなことを選ぶことが出来る場所、「自由な遊び場」となっていることが伺えます。



「私の理想の子どもセンター」の発表

絵地図作りワークショップ

「絵地図分析」とは、子どもにも大人にも利用でき、個々や集団を取り巻く状況、感情、思考を視覚化し、分析する方法です。1枚の模造紙に、提示されたテーマについて参加者が自由に絵と文字を描くことで心・頭の中を映し出したような地図ができ上がり、その地図を見ながら話し合います。

今回はテーマを「私の理想の子どもセンター」とし、子どもと大人が別々のグループで絵地図を作りました。そこから見えてくる子どもたちの期待は多岐にわたっています。

【キャンプ活動】【スポーツができる場所】【いろいろな本、面白い本】【パソコン、楽器、外国語などを習いたい】【新しいことを教える先生】【魚や動物を育てたい】【美味しいお昼を食べられるレストラン】【送迎バス(家が遠くてもセンターに来られ、センターから遠い地域へ皆で出かけ、活動することもできる)】【たくさんのお花】【清潔なトイレ】【ステージ(活動を披露し、テレビで取り上げてもらったら、もっと多くの人々がセンターに来られる)】

多くの子どもが、「もっと多くの人に活動を知ってもらいたい」と語り、自分たちのセンターに誇りを持っている様子を心強く感じます。

職員からは、活動する上での問題点として予算不足があげられているのは相変わらずですが、新たな展開に向けてスキルアップ研修を望む声も少なくなく、意識の変化がみられます。これまでは、子どもセンターで何をしてよいのか分からないという職員が多かったです。センターの20年間のあゆみの中で、通って育った子どもたちが成人し、今度は教員やスタッフ、親として、子どもたちに働きかける側となりつつあります。彼ら自身の発想によるセンターの運営が始まることも、成果のひとつと言えるでしょう。

支援：アーユス仏教国際協力ネットワーク NGO 評価支援事業
(赤井朱子／東京事務所)



絵地図を創る子どもたち

活発な図書活動のために、 先生同士で経験共有

当会はチャンパサック、セコン、カムアン、サワナケットの4県の図書室を設置している小中学校36校を対象に、図書活動強化の教員研修と巡回訪問を実施してきました。

2013年9月～10月、全36校を訪問。「図書室は清潔か」「十分なサービスが提供されているか」「教員が授業に読書を取り入れ、読み聞かせ・朗読・劇など児童生徒に興味を持たせる工夫を活発に行っているか」などについて、33校が到達目標に達していました。

11月、教員と教育指導官で実施した図書活動優良校の見学や課題別意見交換を通じて、問題解決や成功のノウハウが共有できました。互いに刺激し合ったこの経験を通じ、参加者間の関係強化もでき、活発な図書活動を続けていこうという強いパワーが感じられました。担当者の異動などがあっても意欲とノウハウが引き継がれ、活発な図書活動が継続できるよう支援をしていくことが当会に求められています。外務省日本NGO連携無償資金協力「小中学校における図書活用強化事業(第2期)」(本多敏子/ラオス事務所)



優良校を見学し、熱心にメモを取る先生たち

<出版プロジェクト>

虫図鑑『家のまわりの虫』

文：スックパンサー・プバスック

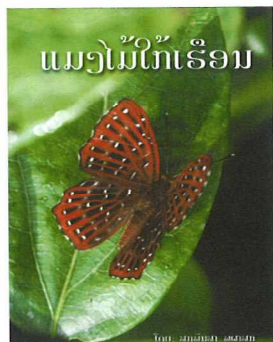
写真：スックパンサー・プバスック他

部数：2,000冊

森の国ラオスで、虫は栄養価の高いごちそう。でもヴィエンチャンでは気持ち悪がる子どもたちも。身近な虫に興味を持ち、生物多様性を考えるきっかけになってほしいとの思いから、この図鑑が生まれました。アリ、チョウ、サソリ(ラオスでは虫)など20種類を取り上げ、生息域、変態、食物連鎖、ラオスの伝統文化、ことわざに至るまで解説。シロアリは図書室の本を食い荒らしますが、その昔、家を建てる時、石の上に柱を立て対策をしたそう。ある日、スタッフが家からゴキブリを生きたまま持って来るので何かと思ったら、本著の撮影のためでした。

支援：財団法人地球市民財団

(秋元波/東京事務所)



日本発

<イベント>

グローバルフェスタJAPAN 2013 ラオス語紙芝居に人垣

10月5～6日、恒例のグローバルフェスタが東京の日比谷公園で開催され、約8万人が来場しました。当会はラオス風あんかけ焼きそばとラオスコーヒーの販売と活動紹介をしました。初日、雨の中、ボランティアが元気に呼び込みをし、晴天の2日目は行列が絶えず、麺が完売すると、あんでだけで販売するほど。

ラオスの紙芝居をラオスと日本の学生ボランティアが演じ、立ち寄ったお客さんからも「ブンパオ、ブンパオ(ふうせん)」「ニヤイクン、ニヤイクン(大きなあれ)」とラオス語がこだましました。(秋元波/東京事務所)



ラオス語紙芝居『ふうせんがほしい』を演じる

「ラオス織物の魅力～藍～」

11月22～26日、浅草の孔雀堂画廊で展示販売会「ラオス織物の魅力～服と小物たち～」を開催しました。今回は「ホアイホン職業訓練センター」の商品が中心。センターは女性自立支援に加え、手紡ぎ、天然染料、手織りの伝統継承に力を入れ、一つひとつが力強く美しいと評判でした。収益はラオスの子どもと女性たちの支援活動に活かします。(尾澤美春/東京事務所)



ホアイホン職業訓練センターの織り子さん

図書活動を支える肝っ玉かあさんと自立の火付け役

ラオス事務所長スラビーの携帯電話は、いつも東西南北の先生からの連絡で鳴り続けています。「今、2人目を妊娠してるの。そうそう貸出しカードが切れたからバスに乗って届けてくれる?」とか「ラオス語全国統一試験で、生徒が県代表に選ばれたよ!図書室ができたおかげだよ。引率で上京したんだけど時間ある?」と地方の先生が朝7時に家の前にいたり。全国の図書室とその担い手をいつも気にかける肝っ玉かあさんスラビーです。

その右腕、スックパンサーは、各地域で自立を促す火付け役。ある中学校で教員と生徒を集め、こんな話し合いをしました。

スックパンサー(ス):図書室利用のメンバー登録料を、生徒はいくら払ことにしますか*?

教員:5000キープ

生徒:オープン時の特別割引はありますか?

校長:では、、、2000キープでどうでしょう?

教員・生徒:ダーイ(OK)!

ス:今年度は一時的に教員室と図書室を兼ねるそうです。教員室に図書を置くことのメリットとデメリットは何でしょう?

教員:たくさんの先生が図書管理に携われるのは良いですが、生徒たちは入って来にくいかも。

ス:では、どうしたらいい?先生がいつも笑顔だったらどう?

生徒:ダーイ(OK)!

先生と生徒が同じ土俵で計画や運営を話し合う機会はラオスではとても少ないですが、だれもが担い手となって活動を支えていけるようオープン時に雰囲気づくりをすることを心がけています。

*図書室運営の予算が確保されていないラオスの学校では、生徒から登録料を集め、運営維持費に当てることが多い。

(秋元波/東京事務所)

みんなでボランティア

子どもたちにたくさんの可能性を感じて

廣瀬未奈さん(理事・ボランティア)

私がラオスを知ったきっかけは大学の研修でした。ラオスがどこにあるかも知らなかった私ですが、ラオスの人の温かさ、優しさ、子どもたちのキラキラした笑顔に魅了され、今ではすっかりラオスの虜です。会との出会いはその研修で現地事務所を訪問した時でした。それから、東京事務所で1年間、ラオス事務所で1か月インターンを経験し、社会人になった今でも、ラオスと何かしらの関わりを持っていたいという思いから、会のイベントや勉強会、活動ミーティングに参加をしています。



ラオス事務所のインターンでは、こどもたちと毎日接する中で、子どもたちにたくさんの可能性があることを間近に感じることができる経験となりました。今後も、子どもたちにたくさんの笑顔が届けられるよう、ボランティアとして会の活動をサポートしていきたいです。

「勉強会」報告

第17回「むかしばなしと絵本、詩あそびと読書活動」(8月3日)

第18回「ラオスのことば—留学生と小1教科書で超入門」(10月19日)

いずれも会場はライフコミュニティ西馬込

今年の勉強会の大きなテーマは「識字」でした。本を読む習慣がほとんどないラオスで、「読むこと=楽しいこと」を子どもたちが体得できるよう当会は試行錯誤を重ねています。

第17回勉強会は、ラオスの人々に馴染み深いむかしばなしや、詩をふまえた当会の絵本出版やラオスの先生への読書活動研修について、そして口承の物語を絵本にするうえでのことばの活かし方などをラオス人作家やラオス事務所スタッフへのインタビューをもとに学び、実際に韻を踏んだ詩「スーン」にもトライしました。



第18回勉強会は、留学生とともにラオスの小学校1年生用教科書の複製版「リズムで学ぶラオス語」(会が2006年に出版。通信58号表紙写真参照)を用い、ラオス語の基礎に触れ、締めくくりにはラオス語カルタでゲームをし、私たちの活動地のことばを学びました。

(秋元波/東京事務所)

表紙の写真

「先生の日」のプレゼントのためにお花を集めたよ——。10月7日は先生の日。この日が近づくたびに「必ず一人ひとつはプレゼントを持って来てください」と、義務のように子どもに言う先生が多いのが首都ヴィエンチャン。中学校では担任にも科目ごとの先生にも大変、と親は嘆いています。そんななか、首都に隣接する農村の小学校で、先生のためにお花を摘んで、照れくさそうにしている子どもたちに出会い、心が和みました。きっと先生も、うれしく受け取ったことでしょう。

(秋元波/東京事務所)

特定非営利活動法人 ラオスのこどもの目的は、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択でき、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。教育が十分に普及していない地域のひとつラオスで活動し、ラオスと日本をはじめ子ども、人々の参加を通じて、だれもが成長の機会を得ることをめざします。

ラオスのこども通信 59号

2013年12月発行 編集人: 森 透

発行: Action with Lao Children / Deknolao

(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: deknolao@yahoo.co.jp

http://deknolao.org

都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分

郵便振替 00140-6-462494

これからの予定 2013年1月~3月

2014年も活動ミーティングを奇数月、勉強会を偶数月、それぞれ第3土曜日に開催します(一部異なる日もあります)。みなさんの参加をお待ちしています。

<活動ミーティング>

現地報告、国内イベントの打ち合わせ、会の運営の意見交換などを行います。
1/18、3/15

<勉強会>

2/15

*内容は調整中です。日程が変更になる場合があります。内容や会場とあわせ、詳細はホームページでお知らせします。

<会の活動がTVで紹介されます>

1/24(金) テレビ東京「佐藤隆太の地球元気!」 21:54放送
キャスターの佐藤隆太さんにチャントソンが活動をお話します。

<パソコン寄贈寄付のお願い>

事務所では現在デスクトップ2台、ラップトップ3台を使っています。これらのシステムはXPで4月以降使えなくなります。使っていないパソコンをお持ちの方お譲り頂けませんか?

メコンのほとり映

アジア国際子ども映画祭

ラオスの高校生の「ストップ・アンド・スタート」が受賞

2013年11月、俳優の杉良太郎さんが発案した「アジア国際子ども映画祭」第7回が南淡路島市で開催されました。「いじめ」をテーマにした3分間の映像作品が、アジアの15の国と地域から45作品、少年矯正局55施設を含む日本の子どもたちから75作品が出品されました。

ラオスの高校生の作品が法務大臣賞を受賞。作品「ストップ・アンド・スタート」は、クラスメートにいじめられている女の子が自殺を図ったけれど、死にきれず、ある日、自分を変えるために綺麗な髪型で自分をアピールし、いじめの人たちに立ち向かい、いじめを解決するというストーリー。人に助けてもらうのではなく、自分自身を強くすることでいじめの人を変えるべき、というメッセージが込められています。

監督のバリヤ・サイヤムンクン君(高校2年)、「ラオスには、あまりいじめがないので色々な資料を読んで作りました」とのこと(機材はデジタル一眼レフを使用)。来日早々インフルエンザにかかり、発表会当日は旅館で受賞の喜びをかみしめたそうです。



監督のバリヤ君